

新市町村の横顔

神栖村



城之内村長

1. 沿革

鹿島から大利根（常陸川）の流れを右手に眺めながらバスにゆられて約40分神栖村役場に着く。

この村の東北部は茫々たる太平洋に面し、西南部は常陸川に沿って、利根川を隔てて千葉県に面し、西北部は鹿島町に、東方は波崎町に接し平坦な地勢で

玄木は松が多いのが目立っている。村の太平洋沿いの陸地は、以前は有名な砂漠地帯が続き一木一草も生えることなく全くの不毛の地として顧りみられなかつたが、戦後に至り食糧事情の急迫を救うため、当局者の熱意と、町民の不くつの斗志は、農業技術の発達などにより、未開の土地を開墾し、植林または開畑に成功し、現在は約「三分の一」程度が昔の面影をとどめている。また村の中央にある「神の池」は、その昔（寛永18年）の大飢饉の際この池から長さ四、五尋もある藻が汀へ打ち寄せ、近隣の者はこれを飯汁として露命をつないだと、伝えられている、昭和30年3月1日旧軽野村と息栖村が合併しこれに若松村の一部が昭和31年2月に合併して、現在の姿となつたのであるが、この新しい村名は軽野の象徴である。「神の池」の神と、息栖村の象徴である息栖神社の息をとり、互譲協和の精神を表現するものとして、神栖村と名づけられたそうである。村の面積は77.66平方町、南北9.00町、東西1.85町、水戸より77.3町の遠きにある。世帯数は2,866、人口16,801人(男8,046、女8,755)村の総予算(昭和34年度)は56,446千円で明るく住みよい、新農村の建設に努力を続けており、その発展が大いに期待されている。また「神の池」の近くに12百万円の予算で新庁舎を建設することになり今年中に着工の運びとなつている。

2. 産 業

村の土質は概して砂質壤土で、特に東海岸方面は砂土で西瓜、甘藷の栽培が多く、中央部以西一帯は腐蝕土が多く、利根川海岸は沖積土で地味肥沃で農耕地に適し水田の大部分はこの地方に存在している。農家戸数は、2,204戸で、総世帯数の7割強に当り、1ヘクタール以上耕作の農家が半数以上を占める純農村である。耕地面積は2,308ヘクタール(田1,357ヘクタール、畑1,146ヘクタール)

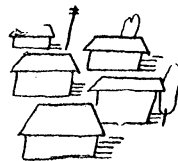
で、主なる作物は水稲面積1,357ヘクタール、麦類1,021ヘクタール、甘藷869ヘクタール、西瓜278ヘクタールなどであり、特産として名高い西瓜は、この砂質壤土の立地条件と気候状況に恵まれ、早期に成熟して近郷の都市や、京浜地区の市場をにぎわし人気を博している。もつとも重大な問題として取り上げられるものは土地改良事業である。特に畑作地の灌漑設備の促進、水田の二毛作化による経営の合理化などがそれであり、村当局としても真剣にこの問題の早期解決に努力を傾注しているところであり、さらに昭和33年牛乳処理所の完成を契機として、乳牛の導入を図り、農業経営の多角化、有畜化の促進など数多くの問題に取り組み、着々と新農村建設の実現に向つて村民一致して進んでいる。

3. 教育文化

この村の小学校は4校(うち分校1)、学級数60、児童数は2,775人(男1,387、女1,388)、中学校3校、学級数26、生徒数1,607人(男839、女768)を有しており(昭和34年学校基本統計調査)、村当局の教育に対する熱意は、常に学校施設の拡充強化と教育内容の充実を図つており、よい環境のもとに子供達が明るく、学び易い教場とすべく努め、着々その成果を挙げつつある。また現在の社会状況に対する社会教育の重要さを痛感して、公民館活動、青年学級、婦人学級などを開設して、新しい村造りの推進力を高めている。

= 城之内村長の抱負 =

庁舎の新設(本年中に着工の予定)有線放送の設置、産業道路の整備、土地改良事業の促進、農協の強化育成庁舎移転に伴う交通機関の整備、果樹園の振興助成、酪農の振興などが重点的に取り上げられ、村民の声を反映して直接、台所に直結した行政を推進して、明るく、住みよい村を造つていきたい。



東村



高城村長

河内村などと同様、その生活圏はむしろ千葉県に属していると言った方がいいだろう。

同じ茨城県の町村でも、県北各村を見て歩いた目にはこの東村はいかにも広々として明るさに満ちている。大げさに言えば、裏日本から表日本に出て来たような感じである。時候がら一面の青田で、バスがその中を利根の堤防に沿って走る時は中々爽快である。ただ埃りがすくく、ワイシャツは一日と持たない。

明治22年13村を廃して十余島村が、7カ村を廃して本新島が、4カ村を廃して伊崎村が、8カ村を廃して大須賀村が出来、そのうち十余島と本新島は下総国香取郡に属していたが、明治32年県域変更により茨城県稲敷郡に編入された。昭和30年1月十余島、本新島、伊崎の3カ村合併により東村が発足し、更に昭和32年2月大須賀村の編入合併により、現在の東村が成立したわけである。

東西16キロ、南北14キロ、面積57.67平方キロ、世帯数2,497、人口14,285人(男6,864人女7,421人)——昭和34年6月末現在——で、豊富な水と見渡す限りの水田が、南国的な情緒をこの村に色づけている。

2. 産 業

この村にあるのは米だけだといつたら言い過ぎだろうか。総耕地面積2,947ヘクタールのうち田は実に2,667ヘクタールそれも殆んど単作である。畑は1割に満たない。山林は更に少い。従って米以外のものは総て買暮しということになる。野菜は佐原から買う。

この単純な産業構造は、村の経済の各方面に影響を与えている。各戸の収入が米を売渡した一時期に限られることは、よほどの計画性がない限り、一年の家計を不安定なものとするだろうことが考えられる。例えば村の納税成績は例年85%程度で特に良いとは言えない状況である。これは、「金は米が出来たら払う」という言葉に集約される。

1. 沿 革

東村とは簡単だがいい名前である。最初「東男に京女」のあづまからとつたのかと思つたが、それは思い過ごしで、ただ単純に郡の最東部にあるから東村なのだそうです。位置からいえば、この村は土浦発佐原行の国鉄バスに乗ること1時間50分、南に大利根を挟んで千葉県佐原市に接しているので、県南各村、たとえば波崎町、新利根

しかし米を握っていると、いつでも金になる時期があつた。終戦直後数年続いたあの景気である。これで村内に贅沢の風潮が生れ、それは今だに尾を引き、かつての村民の気質を一変したという。佐原を経て東京へのルートは、穀倉地帯としては当然辿る道であつたろう。だが稲作単作地として問題はそれで片付くものではない。現在移動労働者が500人程居り、刈織りなどの副業も行われているが、村長のことばにもあるように、生産を高めるよりまともな方策がなければならぬ。ここは水に恵まれている為に100mmも雨が降れば、田が一面に冠水するといわれ、二毛作化も困難のようだが、今年は150戸程耕地整理をやる予定だそうだ。

3. 教 育 文 化

千葉県の佐原一、二高では過去の実績から、この村を準学区扱にしている。従つて村には上記学校卒業者が多い。又ここには幼稚園が6園あつて、入学前の幼児は殆んどこの門をくぐるほど教育には熱心である。役場前に今年4月完成した統合中学校は教育の充実を物語っているようで美しい。

過去この住民は川水を飲料水としていた。その為に学童に寄生虫の保卵率が多く心配されたものである。昭和25年村では100カ所の井戸を堀り、飲料水としての適否を調査したところ、塩分が多く、その殆んどが不適であつた。そこで昭和28年まづ十余島、本新島に簡易水道を設置し、現在まで総工費6,800万円を投じて村の80%までに給水設備が行きわたつている。

村の東端西代から四方の釣場は、ふな、やまべ、ぼらが多く釣れ、東京方面から多くの釣師が入つているが、水郷大橋、横利根の閑門等、水郷の一部を担う観光地としての役割も、見逃し得ないこの村の姿であろう。

～村長のことば～

農業と行政をマッチさせて明るい村づくり

明るい東村の建設は、農業の振興と自治行政の効率的な運営にあります。従つて農業東村の建設は、健全財政を確立して明朗な行政を行うべく、村民の期待と信頼のもとに種々施策を講じ、一步一步建設の礎石を積み重ねて行かねばなりません。また水稲単作地帯としての特殊性から、より生産を高めるよう研究し村民の所得増加を図らなければなりません。

これがためには、村民の意志と与論を尊重し、全体の融和を希求して、村政は常に村民と共にあるものとの信念のもとに、村全体の責任者として任務を果したいと念願します。

昭和34年度一般会計歳入歳出予算

(単位円)

歳入	村税	地方交付税	公営企業及び財産収入	使用料及び手数料	国庫支出金	県支出金	寄付金	繰入金	繰越金	雑収入	合計				
	31,227,800	12,844,000	2,800	1,048,900	781,000	1,187,500	1,504,000	1,000	200,000	80,000	48,877,000				
歳出	議会費	役場費	警 察 消防費	土木費	教育費	社会 労働費	保 健 衛生費	産 業 経済費	財産費	統 計 調査費	選挙費	公債費	諸 支 出 金	予備費	合計
	1,922,600	12,640,900	1,401,510	3,776,700	12,385,700	774,200	441,300	3,299,000	102,000	343,400	777,400	2,712,820	7,779,270	520,200	48,877,000

た わ 雑 感 こ と

夏 枯 清 涼

「よいよ本格的な夏がやつてきた。今年も相変らず……といったアビランスで、陽光は速慮・会釈なくカンカン照りつける。街行く人は何を考えているのであろうか、ただボート右つ左つそれぞれの目的地に向っているに過ぎないように感ぜられてならない。この中にあつてわれわれの神経をミライラミさせることもよそ目に、大マとバス・トラック……などのクラクションの音は一向にこの街から去ろうとしない。それにカン高い音色でスローモーに流れてゆく宣伝カー、ただでさえ数多くなつた自動車それ自体のかなでる雑音、あるいは建設にいやがしい工事現場の騒音等々、まことに騒然たる街であることは疑いない。

これが近代人の神経感覚を麻ひさせ、つまりはノイローゼ患者を増加に導き、神経こう進から各種犯罪への出発点を作り出しているとする放つておくわけにはいくまい。頭がくらくらし、頭痛薬の売行きをよくし、あるいはご婦人の発音不全者の増加も、このミライラミに原因がありそうだという記事をどこかでみたように記憶している。まあ、すべてに清涼剤が必要となつてきた感が深い。

眼をご婦人がたに転じてみよう。服装のことについてはしばらくおき、まず「お肌の季節になりました」……といつても別に叱られまい。ところがここで邪魔が入るので困ると彼女はつぶやく。たとえば、かゆいプツプツお化粧かぶれ、じんましん。ほかに思いがけないたずら者……それは毒虫。まず蚤次に蚊……ほかにいるかも知れない。しかしこれは俗にいうところの清涼剤では防除できないにしても、性質の異なつた清涼剤があれば安心といつたところ。

気温もさることながら、この季節が梅雨期に次いでムササする時であろうか。「当磯浜海岸のミなぎさ家ミでは脱衣所の完備はもちろん、お飲み物、お食事等豊富に取揃え、また売店も併設いたしまして皆様方のお出でをお待ちしております」……と街の一角のスピーカーから流れ出る。これもやはり騒音にちがいないが、波にたわむれ、コウラ干し、美しい脚肢という連想がやすらぎをあたえ、行つてみた。なるほど海岸にはビーチ・パラソルが立ちならび、水着姿でごつたかえしている。

砂浜に低く建てられたたぐさんの海の家・売店また浮

輪の貸出——繰り出す観客はそれぞれ案内ガールによつてすの子張りの家にすい込まれていく。

むしむしした空気の中で、神経こまやかな役所の仕事も決して楽ではない。「今日の暑さはおそらく今年の最高だろう」と、どこかでつぶやく。こうなるとここでもまた清涼剤を求めて退庁のプザーも待遠しく、さつさと左党は生ビールの看板へと急ぐ。店のワキの方へ積み上げられたピヤ樽にはほほえみを交しながら、シヨツブ・カーテンをくぐる。まず最初一杯にありつく——なんともいえないあの色、独得の香り、それにピリツとした味は決して通ではないが、舌ざわりというよりは、のどミを通過するときの触感が、ビールのうまさであろう。

一般に、ビール党は肥るというのが混合剤の殺虫性によるものであるようだ。これが月半ばともなれば、ポケット・マネーも残り少な、勢い風味の変つたお焼ちゆうに豆腐といかざるを得ない。だが、これは私のみではあるまい。

——急に自然という二文字に一人の愛着を覚え、これに倍加して田舎の風情に思いを馳せた。時は過ぎたがあつた美しいたすき姿の茶摘娘を起点として、作り上げられたしつとりとした舌ざわりと甘い緑の新茶の香り……そして水面に浮ぶほこりのようなもの、あれが生命なんだそうで、八十八夜のお茶は不老長寿の妙薬とか——この緑の味と並んで、木の芽の田舎料理の風味も一興。自然の木々の緑と花の赤・桃・白などのコントラストのよさははては青田の上を流れてくる涼風を友として、一日の疲れ身を縁台におく農夫の姿等々。

……やつぱり本当のやすらぎは自然にあるのかも知れない。その証左には人工のものからは何かの作為が感ぜられずぐにどうして……と考えなければならぬ。これに反して自然はゆうゆうと人をリードしてゆく。人がついでいこうがいくまいがおかまいなしである。色にしても、味にしても自然を度外視することはできまい。自然に頭がさがるゆえんだとしみじみ感ずる。いろんな本を読んでみても、この自然を新緑に変化させ、恋の芽をふかせ、そして精力を内包させた姿がいろいろな形でうたわれるのは5月にあるという。これにひきかえ夏枯れのこの時期こそ、適当に清涼剤を注ぎ、そしてすぐやつてくる心身両面の秋の爽りに備えようではないか。